



指切りげんまん

さいとう いほこ
【齊藤 五百子・北海道】

春も終わりに近づいた18年前、父が病に倒れました。病院へ向かう途中、「父さん、もうこの景色見れないなあ」とつぶやいた父を「何言ってるの!! 変なこと言わないで」と叱りました。父は肺炎でした。私は6歳と3歳の娘を連れ、日々病院へと足を運びました。父は日に日に衰弱し、呼吸は荒く、意識も遠のき、命の灯が消えてしまう不安を覚えるばかりでした。

そんなある日、真新しい白衣に身を包んだ看護師さんが入って来て、6歳の娘に「○○ちゃんは大きくなったら何になりたいの?」と聞いたのです。娘が「看護婦さんになりたいの」と迷わず答えると、看護師さんは少し考えた様子で、「本当は駄目なんだけど内緒ね」と自分のナース帽を娘にかぶせ、「おじいちゃん、○○ちゃんは大きくなったら看護婦さんになるんだって。かわいい看護婦さんでしょ?」とその姿を見せてくれました。その時ばかりは父も、目を開け、いつもの優しい笑顔で、うんうんとうなずいていました。そして、「おじいちゃんと約束ね」と父と娘の手を取り、指切りげんまんをさせてくれました。

その後、少しして父は他界しました。成長した娘の夢は変わらず、約束通り看護師になり働いています。現在の娘の姿を見せることはできませんが、あの時、今の娘の姿を見せてあげられたようで、大好きだった父に、最後に一つ、プレゼントができたような気持ちに駆られました。私はあの時の心の看護のおかげで、どんなに救われ、うれしく思い、感謝したか分かりません。あの時の光景を今でも忘れることができません、心からありがとうと伝えたい。

最後に、娘にも誰かの心に残るすてきなエピソードの残せる、心の看護もできる看護師になってほしいと思っています。